

編集者のことば

今度の総合都市研究は二つの特集を組むこととなった。

第一の特集は、大都市高齢社会研究に関する論文と講演記録である。都市研究センターでは、四年前からプロジェクト研究として大都市高齢社会の研究を行ってきたが、この研究成果としての論文が六編である。そのうちの「欧米諸国のモビリティ・ハンディキャップ対策」、「福祉のまちづくりと交通」、「デイ・サービスのプログラム評価と個別実践評価」の三編は高齢社会における移動や交通、福祉サービスに関する研究である。また「大都市高齢者のライフスタイルとモラル」、「都市居住者の社会関係の特質」、「大都市高齢女性の祖母性」の三編は、大都市高齢社会における高齢者の生活様式や社会関係のパターンに関する研究である。

公開講演会の講演記録は、1990年の12月に、パリ大学のフランソワーズ・クリビエ教授をお招きした折に、都市研究センターが毎年行っている公開講演会において、大都市高齢社会をテーマにクリビエ教授と倉沢進教授（当時の都市研究センター所長）にお話して頂いたものである。

都市研究センターが四年間にわたって行ってきた大都市高齢社会研究はプロジェクト研究としては1991年度をもって終了する。しかし、その研究成果は、これからもこの総合都市研究に論文として継続して発表されることになっているし、また都市研究センター叢書として公表されることになっている。叢書としては、「大都市高齢社会のライフスタイル」、「高齢社会と盛り場」、「高齢化社会の街とすまい」、「在宅福祉サービスの現状と課題」の4冊の刊行が予定され、目下準備中である。大都市高齢社会の問題は、むしろこれらが深刻の度を加え、その研究も一層重要になると思われるが、今後高齢社会の研究は個別的な研究として継続される。都市研究センターは、大都市高齢社会のプロジェクト研究につづいて、1992年度から「大都市の地域経済構造変化に対応した環境の保全・創造に関する総合的研究」のプロジェクト研究を開始する。

第二の特集は、「都市問題に関する国際シンポジウム—大都市の成長：その限界と管理—」の講演論文である。このシンポジウムは、1991年10月に東京都立大学の新キャンパス移転を記念し、国際交流事業として、都市研究センターの企画により都立大学国際交流会館において行われた。シンポジウムでは、「大都市の成長—その限界と管理—」をテーマに、D. F. Batten教授（スウェーデンのウメオ大学）、D. Henckel博士（ドイツ都市問題研究所）、G. Burgel教授（パリ大学）、羅福全博士（国連大学プログラム参事官）および石田頼房教授（都市研究センター教授・所長）の各氏の参加を得て、興味深い講演と熱心な討議が行われた。特集は、この時の講演の原稿をとりまとめたものであり、東京をはじめとする大都市の将来を考える上で、これらの論文は多くの示唆をあたえてくれるとよいであろう。

なお、投稿論文としては萩原清子氏の「地域的公共財と資産価値に関する考察」を掲載した。

高橋 勇 悦